



日本語は官能的

にほんご かんのかんげき

デビット・ゾペティ

母国語でない日本語で小説を書いて、よく取材を受ける。大概、似たようなことを聞かれる。「やはり日本語は難しいでしょう?」、「日本語を習得するコツを教えてください」という類の質問だ。

その度、僕は首を傾げてしまう。聞く側が「日本語は極めて特殊な言語だから、その学習も特段に困難だろう」と思っているように感じられて仕方がない。もちろん、日本語には日本語ならではの特色は数多くあるが、世界のどの言語にもその言語特有のものがある。何も日本語だけが特別ではない。

外国語を学ぶ際に大事なものは、まさにそういう特徴と、いかに「接する」か、という「心構え」だと思う。日本語固有の文字表記、言い回し、微妙なニュアンスなどを至難の課題と思うか、逆に「遊び心」でそれに取り組みするか、がポイントだろう。

日本語はこういう「遊び心」をそそられる面をたくさん持っている気がする。欧米の諸言語の習得に「頭脳的」な努力が求められているのに対して、日本語はとて「官能的」な言葉だ。人間の「感覚器官」、分かりやすく言えば、人間の「五感」に直接訴える要素が多いからだ。

例えば、僕は日本語の文字に「視覚的」な魅力を強く

感じる。水墨画に似た美しさがある。漢字は難しいと言われるが、その構成が分かってくると、まるでパズルを組み立てるような楽しさが味わえる

漢字はいわゆる「表意文字」。一つの漢字で、ある概念を表すことができる。僕は今でも原稿用紙と万年筆を使って書いているが、「音」を表すひらがなやカタカナと、そんな特殊性を持った漢字で升目を埋めて、「絵」を「文章」に変えていく作業に「触感的」な喜びを覚えたりする。

さらに、日本語には擬音語と擬態語がある。「川が／さらさらと／流れ、春風が／そよそよと／吹く」、「男性は／ふらふらと／歩き、女性が／ゆったりと／座る」という風に、客観的な事柄や感覚的な印象を「音として」表現する言葉だ。「聴覚」と「視覚」が刺激され、想像力は自由にイメージを作る。

日本語は曖昧な言語だとよく言われる。主語を必要としなかったり、言葉を平気で省いたり、動詞の活用も極端に単純だったりして、英語やドイツ語などに比べて、明確さに欠けている。遠回しな言い方も多ければ、敢えて言葉にしなくても意志が伝わる「あうんの呼吸」という妙な「話術」もある。お辞儀をはじめ、「体」で何かを表現する場合も多い。

机上の勉強だけでは絶対にマスターできない言語だが、場数を踏んで、日本語世界の「官能性」に閃き、「遊び心」で接すれば、とても親しみ易い言葉だと思う。(小説家)